これは陰の脈である。これに脈の虚実とを加えれば診断のかなりの部分がカバー出来ることになる。

治療に於ける陰陽

病状に於ける陰陽の虚実、盛虚、有余不足の病理に向けて、薬物の寒熱、補瀉の薬理を対応させる。これが薬物治療の原則である。鍼灸治療も原則的には同様である。その難しさについて傷寒論の傷寒例第三は王叔和の文章を掲げて誤治誤療を厳に戒めている。古人にとっても陰陽虚実の判定は容易なものではなかったことが分かる。

（平成七年五月例会）

紹　介

山本亨介著『種痘医小山肆成の生涯』

嘉永二年（一八四九）夏、モーニッケによって長崎にもたらされた牛痘苗は、蘭方医たちの努力によって全国に普及した。その後明治四年にボードイン苗にかわるまでの間、これが天然痘予防にはたした役割がいかにおおきいものであったかはよくしられた事実である。嘉永二年をもって、わが国の牛痘接種法元年とすることについては、大方の承認をえている。

これ以前にわが国でおこなわれた牛痘法については、富士川游をはじめ先人の研究によって、いく人かの先駆者が存在していたことがしられるようになり、その事蹟についてもわずかではあるが光があてられるようになった。富士川游の「種痘術の祖の私考」（著作集四所収）によれば、長与俊達（肥前）、小山肆成（紀伊）、井上宗端（下総）、中川五郎治（松前）などがそれである。

孫の長与専斎が明治新政府の衛生行政の中で枢要な地位をしめるようになったので、祖父である長与俊達の事蹟はあきらかにされている。

中川五郎治については、松木明知の三〇年にもおよぶ史料探索の結果が数十編の論文として実をむすび、五郎治の系譜のかなりの部分が解明されるにいたった。

しかしその一人、小山肆成についてはあまりに不明の部分がおおきかった。あと数年で明治維新をむかえるという文久二年（一八六二）に肆成が歿し、そして養女雪江、妻と相ついで世をさったため、肆成の活躍をつたえる文書類が散逸し、墓も無縁になってしまったという。このように史料のとぼしい人物をとりあげて、何とか世にだしたいと願って執筆されたのが本書である。同じ紀州の出身である著者は、肆成が華岡青洲と肩をならべるほどの業績をあげた人物との信念にもとづいて、郷土の偉人にあたたかい眼ざしをそそいでまとめあげた。

著者は天狗太郎のペンネームももつ作家で、昭和三八年朝日新聞の将棋観戦記者を最後に文筆生活にはいった。本書は作家としての著者の筆はこびによって、さすがに丁寧な、よ

みやすい文章でつづられている。古文書の引用が原文のままであったり、現代文に翻訳されていたりと統一をかくのが目につくが、人痘法や牛痘法についての技術的な理解はかなりゆきとどいている。

しかしここでいくつかの問題点を指摘したい。

モーニッケ苗以前の牛痘法がどのような痘苗をもちいたか、どのようにしてそれを手にいれたか、という点はもっとも関心のあるところである。

小山肆成は師の高階経宣の好意によって、邱浩川の『引痘略』を筆写することをゆるされた。これによって牛痘接種が天然痘を予防する有力な手段であるとの知識は身につけたものの、肝心の牛痘苗を入手する方策については皆目見当がつかなかった。

最初に肆成がこころみたのは、人痘痂を牛の鼻孔にそそぐことであった。これによる発痘を目論んだが、結果はむろん失敗であった。ついで牛痘に罹患した牛を手にいれ、この膿をまず妻に接種して成功したという（一三一頁）。

しかしその直後の一四〇頁には、

今度は上好の人痘を選んで子牛の乳のかたわらにうえた。三頭のうち、一頭は乳のかたわらに疱を生じた。これを痘苗として、郷里の熊野で「牛痘の法」を小児におこなって成功した、としるされている。これでは用いた痘苗がいかなる種類のものであったかという、われわれがもっとも知りたい疑問点にこたえてくれていない。

さらに本書でもっとも衝撃的な箇所であり、著者に再考ねがいたいのは次の記述である。

痘瘡の流行略史の中に、痘毒をアメリカ・インディアンにたいして細菌兵器として使用したというくだりがある（四一頁）。この文章につづいて肆成の業績を評した添川正の『日本痘苗史序説』にたいして著者は

（添川は）「小山肆成は、舶来した牛痘毒を政撃用毒として用いているが」とする。……痘苗史の権威ある著作とされるものであるだけに、ぜひとも御再考を願いたいと思う（四三頁）。

とのべている。そして

（このころ）種痘苗は、人から人へ接種して苗を確保しなければならず、舶載苗を手にした医家は苗を確保することで頭がいっぱいであった。

そうした事情のもとで、肆成が「舶来した牛痘苗を攻撃毒」として用いることはありえなかった（四四頁）。

と肆成を弁護している。

そこで添川の著書をもう一度丁寧によんでみた。

彼（肆成）は良好な人痘を犢の乳房に接種したところ発痘し、この痘疱及びこれを接種された小児の経過が、成書に記述されているものと同一であり、更に接種された小児に、長崎由来の牛痘苗を接種しても発痘を見なかったという（三四頁）。

現今ではワクチンの効果は、血液中の抗体を測定すること

によって判定できる。それ以前には、何らかの後処置をくわえてそれにたいする反応を確認して、前処置の効果を判定していた。肆成についていえば、後処置として「舶来した牛痘毒」を接種して、その直前の処置によって防禦力を獲得できたか否かをたしかめたということである。

一般に実験動物に反応をおこさせるために、被験物質を投与することを、実験生理学や実験薬理学では「攻撃する」という表現を用いることがある。「攻撃する」や「攻撃毒」といっても、けっして細菌戦争とは縁もゆかりもない言葉なのである。

添川が「攻撃用毒」という用語を使用したことはまちがっていないし、専門家が日常使用している言葉として、何らその影響を考えることなく使用したにちがいない。しかしちょっとした配慮が必要ではなかったか、とも思う。親しく教えをうけた後学として、新刊紹介の任をあたえられた機会に、添川の名誉のためにあえてのべておきたい。

以上二、三の問題点はあるが、今までうずもれていた小山肆成の業績をあきらかにした成書として、おおいに教えられる所がおおい。なお著者は、さる一一月一〇日に病没されたことを追記する。

（深瀬　泰旦）

〔時事通信社、東京都千代田区日比谷公園一ノ三、電話〇三―三五九一―一一一一、一九九四年一二月一五日発行、B6判、二〇八頁、定価一五〇〇円〕

大塚恭男著『医学史こぼれ話』

医史学研究を行う者は時代を越えた医学ジャーナリストである。すなわち時代を溯って取材に行き、考察を加えて記事を書き、読者に届けなければならない。これを記者の立場に立ってやって見せてくれたのが『医学史こぼれ話』である。

『漢方医学』という月刊誌で初めてこのコラムを見た時から非常に興味を持った。記事の初めに発信地と年がきちんと入っていて鮮やかな印象を与え、著名な人物が主役として登場し、一般の医史学書とは一味ちがった柔らかい表現でその人物の言動の意味や時代背景を紹介していて、サラリとしたユーモアで締め括る。一つの記事は四〇〇字足らずの短いものである。それが毎号二題ずつ、縦に細長いコラムに横書きで書かれていた。漢方に馴染みのうすい者にとっては、雑誌の中でこの部分だけを楽しんで読んでいた。

新聞記事に準じた書き方なので執筆者名はついていない。誰が書いているのだろう。実に博識、洋の東西を問わず色々な地域・時代が並んでいた。内容はこぼれ話と名乗っているように、医学の発明発見の物語ではなく、特に三面記事で幅広いニュースが盛りこまれていた。

それが今回一冊の本となって世に出た。大塚恭男先生の筆によると知って納得がいった。西洋医学を充分にこなした上で、わが国の東洋医学の第一人者としての名声の高い人であ